

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K03390

研究課題名（和文）ASD女子を対象とした臨床行動分析的グループ療法の効果研究

研究課題名（英文）Effects of clinical behavior analysis for ASD girls group.

研究代表者

佐田久 真貴（SADAHISA, MAKI）

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号：10441479

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ASDなど発達障害の特性のある女子に限定した臨床行動分析学に基づくグループ活動の実践と応用行動分析（ABA）的検証を目的としている。研究期間では3つのグループを実施することができた。個々の課題に対しては、ケースフォーミュレーションに基づき個別介入が奏功した。そして、グループ活動での心理教育による課題解決や特性理解の促進、獲得しているソーシャルスキルの発揮などが確認された。

参加者の満足度は高く、仲間へのかかわり方がより良好かつ適応的な表現に変容し、日常生活においても心理教育の効果が認められた。また、保護者インタビューを行い、グループ活動の社会的意義・臨床的意義が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

DSM-5ではASDは女性よりも男性に4倍多く診断されること、臨床例で知的能力障害または言語の遅れを伴わない女兒は認定されずにいることを指摘した。本邦もASD女子たちの早期発見と支援が遅れていることが指摘されている。本研究では3グループを実施することができ、個々の課題にはABAによるアプローチの効果が認められ、グループ内では相互の理解や自身の特性理解の促進効果が得られた。保護者へのインタビュー調査により、幼少期と思春期の特性の現れ方を検証したところ、知的能力障害を伴わない発達障害女兒の早期介入の難しさが示唆された。彼女たちを養育する保護者への臨床心理学的支援は重要な課題の1つである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to conduct group activities based on clinical behavior analysis limited to girls with developmental disorders such as ASD and to verify applied behavior analysis (ABA). During the study period, three study groups were established. Individual interventions based on case formulation were successful to tackle individual challenges, and it was confirmed that psychoeducation in group activities promoted problem-solving and understanding of characteristics and that the participants demonstrated acquired social skills during the activities. Participants were highly satisfied with the group activities, and their interactions with their peers were transformed into better and more adaptive expressions, and the effects of psychoeducation were observed in daily life. Furthermore, interviews with parents were conducted, and the social and clinical significance of group activities were confirmed.

研究分野：臨床心理学

キーワード：ASD女子 臨床行動分析 グループ 発達障害 特性理解

1. 研究開始当初の背景

本研究のテーマは国内外でも注目はされつつも、学術研究としては数少ない領域であった。その理由の根底には、ASD の診断を受ける女子が圧倒的に少ないという点がある (Simon, 2010)。DSM-5 では ASD は女性よりも男性に 4 倍多く診断されること、臨床例で知的能力障害または言語の遅れを伴わない女児は認定されずにいる可能性があることを指摘している。我が国も同様で、ASD 女子たちの早期発見と支援が遅れていることが指摘されていた。また、実践現場では発達障害児への支援プログラムが様々な専門機関で開発・実施され、その効果や課題が数多く報告されているが、女子のみを対象として開発されたものの学術的報告は少ない。その背景には、多数を占めていると考えられていた発達障害の男児・男性に特徴的な行動や問題点を中心とした診断基準や問題行動への対処法が研究されてきた経緯がある (木谷, 2019)。このような状況であることから、現実生活を送っている ASD 女子への支援や介入について学術研究としてさらに発展させ、当事者やその関係者へ還元していくことが喫緊の課題といえる。

2. 研究の目的

本研究では、臨床行動分析的グループ療法の実践から効果検証を行う。ASD 特性のある女子特有の問題や悩みゆえ、丁寧にかつ繊細に扱う必要性が高い。保護者や本人だけで解決しにくいことが、集団であることや仲間を意識することによって、日常生活のスキル習得と問題の解決、さらには不安の軽減、自己効力感の増加、将来についての目標を含めた意思決定や自己肯定感の向上につながることを予測できる。また、正しい知識の習得やスキル形成の効果の 1 つとして、身近に起こりうる犯罪からの回避につながることも期待できるだろう。本研究では発達段階や成長に応じた女子特有の問題を、個人の「心の中の働き」であるとは考えずに、「個人と環境との相互作用」からとらえ、ASD 女子に必要な行動レパートリーを増やしていくよう支援する。この介入方法の中に、ストラテジーとタクティクスの関係性が存在しており、この関係性を効果的に活用したテクニックを臨床現場へ還元し、包括的な支援として展開することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) グループの概要

発達障害のある女児・女子を対象にしたグループ「あでりーくらぶ」は筆者 (以下, Th) が運営している応用行動分析 (以下, ABA) を基盤にしたグループである。臨床心理学を学んでいる大学院生がスタッフとして参加している。グループ構成員は学年、特性等を考慮し、Th が構成し、本研究では 3 つのグループを運営することができた。各グループはその年代に応じて異なる。1 回約 90 分とし、プログラムは「気分の確認」「学びの時間」「エクササイズ」「茶話会」「ふりかえり・アンケート」とした。「学びの時間」は、それぞれの課題や困っていることをターゲットとし、ABA の考え方やワークを実践する。「エクササイズ」では、女子集団で共有できる話題、活動を用意する。大学卒業から就労を迎えたグループでは、活動頻度を下げ、「同窓会」として活動している。おおまかな活動の流れを表 1 に示す。

表 1 活動の流れ

親子面接	アセスメント
受付	名札をつけて準備
気分シート or 確認	1 週間の気分を振り返る (高校生以上には短縮版 POMS 青少年版を実施)
学びの時間	障害特性や困り感に焦点をあてた内容で個別対応が中心 (ABA 的介入)
エクササイズ	女子・女性特有の知識とスキルに焦点を当て、さらに「おしゃべり」を楽しむ場面にあるよう設定した
茶話会	自由な構造とした
アンケート等	振り返りを行い、次回の活動内を予告
個別対応	依頼時を含めて必要時に実施

グループには、特性について医療機関で告知をうけている女子が参加しているが、小学生の場合は自身の特性については専門医からの告知は未実施であった。状況に応じて、「学びの時間」等で用いる資料はアレンジした。

また、今回の実施期間には Covid19 によるパンデミック禍を経験した。本活動も影響があったが、オンライングループ活動を実施し、その効果検証を行ったので、その報告を含む。

(2) 効果検証

各グループの実践報告、個別介入の実践報告、保護者へのインタビュー調査、の 3 点を報告する。

4. 研究成果

(1) Covid19 パンデミック禍における実践報告

オンライン形態による支援期間は、約半年で、その間にグループ活動はのべ 11 回であった。1 回の活動は約 60 分とした。活動内容は、「近況報告」「学びの時間」「エクササイズ(ゲーム)」「茶話会」「アンケート」で構成された。「学びの時間」では、予防的心理教育として、Covid19 に関するテーマを取り入れた。「エクササイズ」では、お題に合ったものを見つけてきて、画面に見せ合うゲームや、zoom 機能を用いて描画作業を同時に行う等を取り入れた。

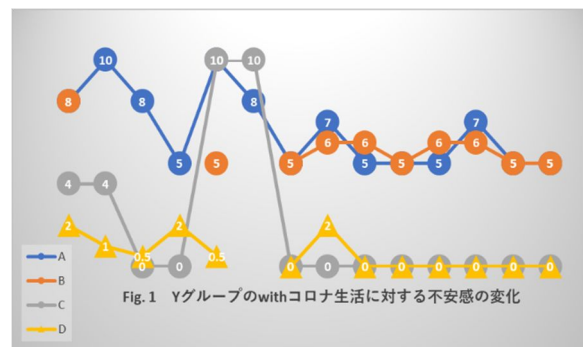
オンライン個別面談とオンライングループ活動への参加率は理由のある欠席を除いて 100% であった。緊急事態宣言が発令された時期は全員が「休みが長くなってうれしい」と回答したが、中盤になると「学校の課題が多い」「外出できない」「やる事がなく退屈」「学校の友だちとおしゃべりしたい」など、ネガティブな気持ちや考えが頻出した。オンライン活動後アンケートでは、全員から良好な評価を得た。コロナ禍での実施形態に関する質問には、「オンラインのままがいい」「オンラインと対面どちらでもいい」「対面の方が話しやすい」等の回答があった。

また、Covid19 に伴う影響について、「ゲームの時間が長くなった」「運動不足になった」「オンラインで出される課題を終えることができない」といった回答がみられた。その一方、「通学時間の代わりにできることが増えた」「メールで課題の質問がしやすい」「家で過ごす時間が増えて体力的に楽になった」などの回答もあった。

Covid19 に対する考えやマスク等の感染拡大防止のための生活様式に慣れたという回答は 9 割となった一方で、不安感については減少傾向とはいえ、維持された参加者が多い (Fig. 1)。

さまざまな制限がある中で、仲間とのつながりを実感できるオンライン活動が可能だった。

予防的心理教育の観点からのテーマを「学びの時間」に導入したこの支援継続は、参加者の自身の健康維持、所属感や仲間とのつながりを感じることで、ネットツールとの安全なかわり方を親子で意識すること、等の効果があったと考えられる。

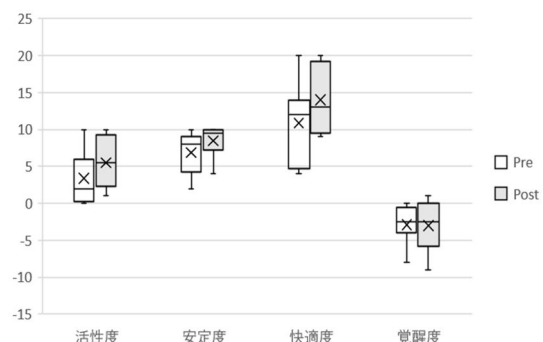


(2) 感覚特性に着目した支援プログラム

臨床現場では、ASD の感覚特性に着目した支援が展開されている。また、感覚特性の問題は尋常ではない辛さを有するものの、その苦痛を周囲に伝達できないために、周囲にとって理解できない行動を問題行動とされたり、愛着の問題とされたりする (森戸ら, 2017)。感覚に着目した心理教育の一環として“嗅覚”に着目したイベントを企画し、感覚特性や好みの香りを把握することで生活の質を向上させたり、痛みやストレスを緩和させたりする機能があるとされているアロマセラピー教室を試みた。この企画までに、“居心地のよいこと探しプログラム”を実施しており、自身の発達特性の理解促進とストレスや緊張を緩和する具体策を獲得した。プログラムは、日本版青年・成人感覚プロファイル (The Adolescent/Adult Sensory Profile: AASP) の実施とそのフィードバック、居心地のよい場所探し、好みの香りとその利用方法、で構成した。

アロマ教室実施の結果、「活性度」「安定度」「快適度」は教室参加後、有意に高くなった。

「覚醒度」は変化がなかった。また、アンケート調査では合同での実施について、新たな体験だったことについて高評価であった。また、アロマを生活の中で活用できたことを保護者から報告された。感覚特性による不適応へのアプローチには、環境調整や不快な刺激を取り除く等の工夫案や方略は多い。今回は、自身の感覚特性を学んだあと、その感覚特性や刺激を効果的に活用する視点を促し、その効果を体験する試みだった。仲間や家族で楽しみながら作業をして、それを生活の中で活用している事例も確認できた。



(3) 保護者インタビュー調査

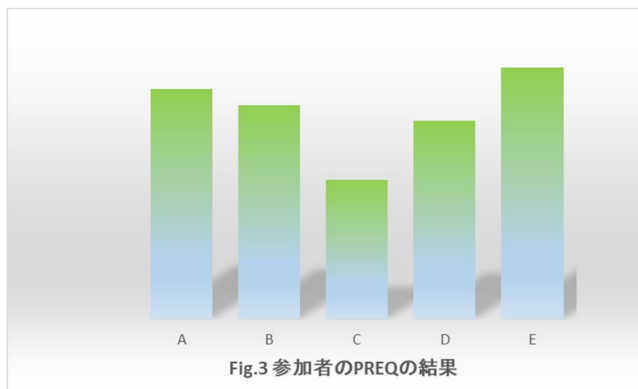
調査期間は 20XX 年 8 月~10 月であった。約 90 分の半構造化面接を実施し、インタビューガイドを元にした子育ての体験を語って頂いた。場所は、Z 大学附属施設内の面接室あるいは検査室を使用した。個々の母親の葛藤や背景、養育する親としての適応について、インタビュー

ガイドに沿って共通性や特異性を中心に分析した。また、養育レジリエンス質問票（以下、PREQ）を使用し、子育てに関わるレジリエンスを測定した。

以下、語りの概略を示す。【初めて気づききっかけ】では、5名全員が幼児期の発達について不安や気になる感覚を抱いたことが語られた。児童期では【いじめ】と【友人関係】が共通項である一方、【特性への理解】が進むことが見出された。「知識」「集中力」「作業の正確性」、そして「悪意がなく素直」など子の強みを感じ、自身と比較して感心や尊敬を示す語りもあった。ただ、その能力が「融通の利かなさ」にもつながっていることについても語られた。【困難に対する構え】では「なんとかなる」や「前向きに」という語りが得られた。その語りの前には「いろいろありました」や、「学校は大変だった」といった苦慮した経験が前提として表現された。将来に向けて、本人自身が「相談できる場」を身近にもってほしいという願いが全員から語られた。

またPREQの平均が78.6と高い結果が示された。個々の結果をFig.3に示す。

困難なことが起きたとしても、「なんとかなる」等のストレスを感じる語りが全員から得られた。子の障害と向き合い、正しい理解や知識を獲得しながら、子に合ったかかわりをされてきた保護者が、さまざまな葛藤や苦勞を乗り越え、心理的ウェルビーイングが実現している状態にあることが推察された。子の障害を理解することは、保護者の価値観の揺らぎや生き方の立て直しを求められるといえるが、その保護者を支える役割も重要であり、支援者に求められる課題を得たインタビュー調査となった。



<引用文献>

- Rudy Simone (2010) Aspergirls: Empowering Females with Asperger Syndrome .
木谷秀勝・岩男英美 .(2019). 発達障害のある女の子・女性の支援：「自分らしく生きる」ための「からだ・こころ・関係性」のサポート . 川上ちひろ・木谷秀勝（編著）, 現場で取り組まれている発達障害のある女の子・女性の支援プログラム：楽しむことをベースにした「アスペガールの集い」: 金子書房 .
森戸雅子, 小田桐早苗, 岩藤百香ら (2017) 自閉症スペクトラム障害児の感覚特性に着目した家族支援 . 川崎医療福祉学会誌, 27(1) : 13-25 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐田久真貴	4. 巻 61(2)
2. 論文標題 感覚処理特性の把握を支援に活かした2事例	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 小児の精神と神経	6. 最初と最後の頁 111-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24782/jsppn.61.2_111	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐田久真貴	4. 巻 22(1)
2. 論文標題 発達障害臨床におけるアロマセラピーの有用性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アロマセラピー学会誌	6. 最初と最後の頁 49-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐田久真貴	4. 巻 64(1)
2. 論文標題 発達障害のある女子グループ活動の実践報告 居心地のよいこと探しプログラム	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 小児の精神と神経	6. 最初と最後の頁 57-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24782/jsppn.64.1_57	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 佐田久真貴
2. 発表標題 発達障害女子グループにおけるCovid19流行下での継続支援予防的ー心理教育の視点からー
3. 学会等名 日本特殊教育学会第60回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Maki Sadahisa
2. 発表標題 Cognitive-behavioral therapy for an adolescent girl with autism spectrum disorder
3. 学会等名 The 50th European Association for Behavioural and Cognitive Therapies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐田久真貴
2. 発表標題 発達障害女子オンライングループの活動可能性に関する展望
3. 学会等名 日本特殊教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Maki SADAHISA
2. 発表標題 Cognitive-behavioral therapy for an adolescent girl with autism spectrum disorder (ASD)
3. 学会等名 The 49th European Association for Behavioural and Cognitive Therapies (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐田久真貴
2. 発表標題 発達障害女子に対するグループ療法の実践報告 感覚に着目したアロマ教室の効果
3. 学会等名 日本特殊教育学会第61回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 佐田久真貴
2. 発表標題 発達障がいの女の子を対象にした居心地のよいこと探しプログラム ~アロマ教室の効果~
3. 学会等名 日本アロマセラピー学会関西・中四国地方会（招待講演）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関